
手のひらに太陽の家プロジェクト

1年間の活動報告



平成25年7月21日

目次

一周年をむかえて 【理事長 佐々木豊志】	1
<ごあいさつ> 【所長 細木典子】	2
活動報告	
<利用状況について>	3
<受入れの概要>	4
夏休みおためし保養	
9月～12月	
1月～3月	
4月～7月	
<ボランティア>	8
<地域との関係>	10
<課題と今後の展望>	10
<利用者アンケートから>	11
まとめ	15

一周年をむかえて

日本の森バイオマスネットワーク

理事長 佐々木 豊志

2011年3月11日、あの日からどれだけの方が辛い体験をしたことでしょうか。そして、福島では福島第一原発事故によって放射線という見えない恐怖にどれだけ苦しめられたことでしょうか。

東日本大震災は、私たちに多くの試練を与えてくれました。その中でたくさんの方々助け合い支え合いました。“手のひらに太陽の家”も、多くの方々の多くの思いの結集で実現し、これまで運営して参りました。おかげさまで、昨年7月21日に開所してから1年を迎えます。その間、福島からこれまでに150家族、のべ2658名の方々が滞在しました。子どもたちは、福島ではできなかった、外で土をいじり、草木に触れ、自然の中で遊ぶことを、手のひらに太陽の家に滞在して存分に体験することができました。放射線の影響を受けやすい小さな子どもを抱えた親御さんにとって、少しでも放射線量が高い地域から離れることが唯一その恐怖から逃れる方法だったことを改めて知りました。こんな思いと不安を抱えて来られた福島の方々の窮状を理解し、暖かく迎えていただいた登米市の皆様、かっぱの会の皆様を始め、遠くから来ていただいたボランティアの方々に運営を支えていただきました。

“手のひらに太陽の家”は、勿論子どもたちにとって意味ある場所になりましたが、親御さんたちにとっても大変意義深い施設になりました。福島では親御さんたちは口に出せないほどのストレスを抱え、苦しんでいました。手のひらに太陽の家に滞在することで、少しでもそのストレスが和らぐ機会になりました。

このように、“手のひらに太陽の家”が、被災地の支援として目的が達成されていることは、施設の建設に多大な応援をいただいたモンベルを始め、設備・備品など数々のハードの支援と、様々な受け入れ体験プログラムのソフトの支援をしていただいた数多くの企業、団体、個人の皆様の深いご理解と暖かいご支援、ご協力のおかげであると思います。

“手のひらに太陽の家”の開設1周年を振り返り、心から深く感謝申し上げますとともに、今後ともご理解ご協力を重ねてお願い申し上げます。

<ごあいさつ>

ある夕ぐれ時、「手のひらに太陽の家」に一本の電話。それは「夕日がきれいですよ」という、たったそれだけの事を伝える電話でした。たったそれだけのことを伝えるためにかけてくださった電話の、なんてあたたかいこと！その場に居合わせた、福島のおかあさんも子ども達も、ボランティアさんもスタッフも、急いで外に出て沈む夕陽を眺め、大喜びしてそして少し、涙しました。

こんなできごとが数えきれないくらいたくさんあって、誰かが誰かを想うことの大切さと尊さを教えられ、力をもらった一年でした。

7月21日、「手のひらに太陽の家」はおかげさまで開所から一周年を迎えます。何もかも初めてのことで、戸惑いながらのスタートでしたが、たくさんの方々のご支援をいただき、こうして一周年をむかえる事ができましたこと、心より御礼申し上げます。

東日本大震災から2年以上が経過しましたが、福島の現状はまだまだ厳しいものがあります。子育てをしながら不安ばかりが募り、何が正しくて何が間違っているのかもわからなくなってしまいそうな日々の中、それでも子どもを守るため、できる限りの事をしようがんばっているお父さんお母さん。私たちはそこに静かに寄り添っていきたいと思っています。医者や政治家のように目に見える形で何かができるわけではありませんが、ただ静かにそこにいる事、そこに在る事が大切な場合もあると思うから。

不安に押しつぶされそうになっているお母さんの肩に置かれる手のひらが、春の太陽のようにあたたかなものでありますように。手のひらに太陽の家が、そんな場所でありますように。

手のひらに太陽の家
所長 細木 典子

活動報告

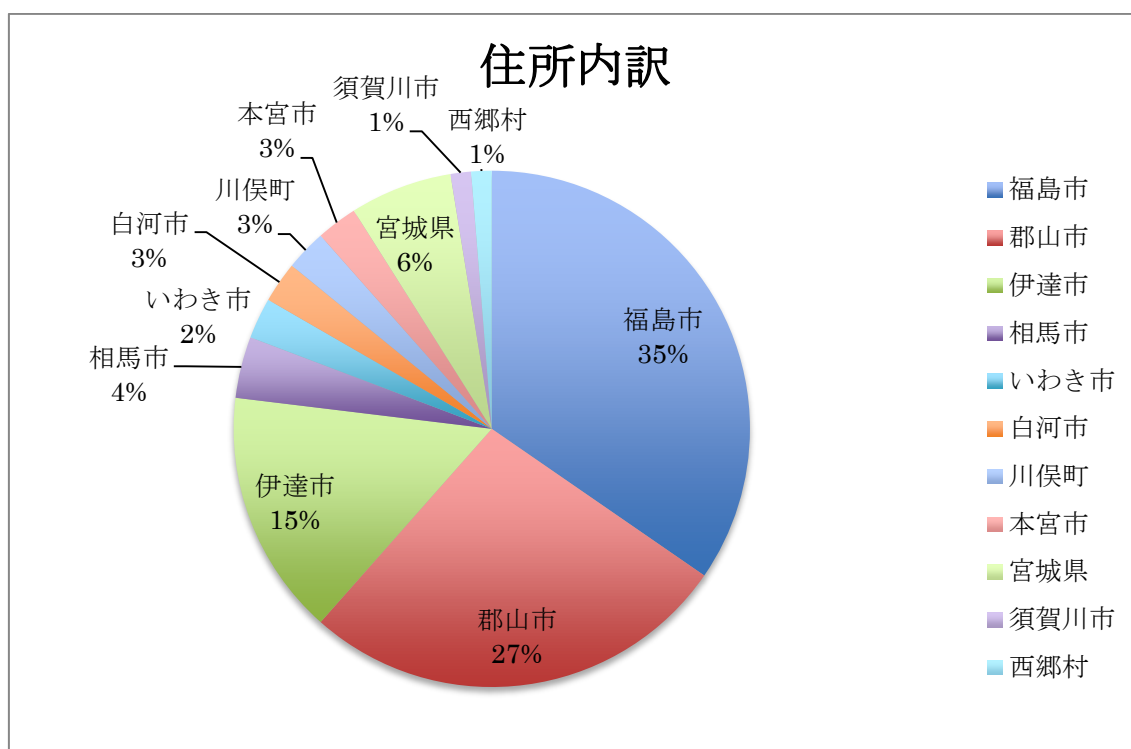
<利用状況について>

1、 利用人数

7月20日現在 のべ2658名（1日平均7.3人）

利用家族数・・・150家族（月ごとの利用家族の合計）

2、 利用者の居住地域



3、 平均滞在期間 5.9日

平日の利用は少なく、長期の休み（夏休み、冬休み、春休み）の利用が多かった。

4、 その他

小学生以上の子どもがいる家族は、夏休みや冬休みなど長期の休みや、連休に集中。平日は未就学の子ども達とお母さんという形に落ち着いている。リピーターの方が増えて来て、連帯感も生まれて来ているが、一方でまだまだこの存在が知られておらず、広報の仕方を工夫する必要もある。平日の潜在需要としては、乳幼児を抱えて動きのとれない母親のための送迎つき保養、保育園や学校の移動教室、子供会行事としての保養などが考えられる。7月には、ルーテル教会様のご支援により、バスの送迎つきプランを初めて実行。5家族が参加し、森のようちえんなどを楽しんだ。

他の保養企画との違いは、いつでも思い立った時に利用できること、また個室にバストイレ付きなので、赤ちゃんや障害を持ったお子さん等、集団での企画参加を躊躇してしまうご家族にも気軽に利用していただけることなどである。

<受入れの概要>

1、 夏休みおためし保養

開所式のその日から、受入れを開始。夏休み期間中はスタッフも試行錯誤の日々であった。

放射能のことについて、地元では深い話ができない事、子ども達の体力が落ちていて、運動会で転ぶ子どもが増えた事、食べ物に気をつかうあまり、栄養が偏ってしまう家庭もあること、購入する食品を選ぶ事で経済的に負担が大きい事など、福島のお母さん達が抱える悩みを具体的に知ることとなった。

夏休みのイベント

マクロビオティックヨガ、北上川クルーズ、流しそうめん
川遊び、米粉パン作り、フラワーアレンジメント、キャンプ
ラフターヨガ、芋掘り体験、独楽の絵付け体験など



2、 9月～12月

夏休みの喧噪が去り、落ち着いた日々の中、2～3週間という長めの滞在を希望される方が出始め、並行して夏休みの利用者がリピーターとして利用されるケースが増えてきた。小学生以上の子どもたちは学校があるのでなかなか利用できないが、未就学の子どもを抱えたお母さんは、日常的に外遊びが制限される福島での生活にやはり不安を隠しきれず、少しでも線量の低い地域で子どもと過ごしたいと、手のひらに太陽の家に来てくるようになった。

子どもたちのケアとともに、当初から母親のメンタル面のケアが必要であると考えていたが、日々、母親達の悩みを聞きながら、やはりそれこそが大事なのだとあらためて感じた。目に見えない放射能が将来子どもにどのような影響を与えるのか、考えれば考える程、不安が大きくなる。母親が精神的に不安定であれば、それは必ず子どもに投影され、成長の妨げとなる。親が落ち着いて笑顔でいる事が子どもにとっては何より大切なのだ。

そこで、母親が精神的に安定するための企画に力をいれるようになったのがこの時期であった。母親対象に栄養学の講座（体内に取り入れてしまったセシ

ウムをなるべく早く体外に排出する食べ方、免疫力を高める食品など)、カウンセリング、料理教室などを行った。



3、 1月～3月

冬休み、2月の連休、春休みと、長い休みには満室になる事がほとんどだった。福島のサッカーチームの団体が利用した時にはお父さん達の活躍が際立っており、その他の利用者もまじって楽しい時間を過ごした。

仙台閉上で被災した親子が、秋から毎週のように週末利用していたが、12月から地元登米の小学校に転校して、長期での利用第一号となった。また、3月末からは、福島市から4歳と1歳のお子さんを連れて長期での利用を希望する家族が滞在することになった。

冬の間は移動が大変な事もあり、連休以外は静かな日が多かったが、その分利用者との関わりが密になり、家族のような信頼関係を築けたように思う。



4、 4月～6月

長期滞在の2家族中心に新学期が始まった。

基本的には家族の日常生活を大切に、利用者が多い時にはイベントをはさんでという形に落ち着いてきた。

長期滞在の方々対象には、みそ作りや料理教室などのイベントの他にも、お花見やミニ遠足など日常の中にお楽しみの時間を作ること、また、お母さんが自分の時間を持てるように、ボランティアさんに子ども達の相手をしてもらうことなど、ここでの生活が充実したものになるよう工夫した。

12月から滞在した母子が、さまざまな事情から5月末で仙台に戻る事にな

ったが、入れ替わりに郡山から長期滞在を希望する母子が来ている。

4月からはビオトープ作りのワークショップも始まり、手のひらに太陽の家は日々変化を遂げている。



<ボランティア>

昨年7月の開所以前から、建物の壁のペンキ塗りや、掃除などでたくさんの方々にご協力をいただいているが、開所してからは全国各地から、ボランティアの方々に来て下さり、さまざまな形でプロジェクトを応援して下さった。

曜日を決めて、定期的に来てくださる方は、こちらの事情も理解してくださっているので、スタッフの手を煩わせる事もなく自主的に仕事を見つけて動いてくれるので、おおいに助かった。ふだんなかなか手の回らない窓ふきや、段ボール類の片付け、冷蔵庫内の整理などを手伝っていただいた。

学生で、被災地のボランティアを希望されて来る方は、長崎、大阪、山口、東京、神奈川など全国各地から集まり、中には海外留学生で日本に帰国した際に何かしたいと来てくださった方もいた。学生さんたちには、子どもの遊び相手になってもらう事が多く、滞在している子ども達はもちろん、お母さん方にも好評だった。

高校生が地球環境を考える Blue Earth Project のメンバーは、手作りキャンドル販売の収益金を寄付してくださるとともに、2泊3日でボランティアに来てくださり、子ども達と思いっきり遊び、同時に福島の現状について多くの事を学んで帰った。

仕事を持ちながらも、休日を利用して来てくださる方々もいて、2年が経過しても東北に思いを寄せてくださっている事に頭が下がる。

その他、東京の下町のホットサンド屋さんの炊き出し、タクシー運転手さんの有志によるBBQ、クラシック音楽のコンサート、ロックのライブなどなど、本当にいろいろな形で応援をいただいた。



<地域との関係>

特筆すべきは、とよまかっぱの会の皆さんの協力である。夏のキャンプ、クルージング、流しそうめんなどなど、イベントに必要な人手を快く出してくださり、スタッフだけでは準備しきれない道具や食材等も手際よく準備してくださった。また、春から始まったビオトープ作りでは、井戸掘り、土留め、木材や土運びなどの重労働や、竹垣づくりなどもしていただき、感謝してもしきれないほどである。

当初、この場所で何が始まるのかと、恐る恐る遠巻きに見ていたご近所の方々も、日にちが経つにつれ理解を示してくださるようになり、畑でとれた野菜を差し入れしてくださったり、子ども達に声をかけてくださったりするようになった。ご近所の方々のご理解とご協力なしには成り立って行かない活動である。

また、登米市がさまざまな場面で協力をしてくださっている事が、大きな力となっている。地域の小学校に転校を希望する子どもが来た時も、移動教室の可能性を相談した時も、とても気持ちのよい対応をしてくださり、心強く感じた。登米市で良かったと心から思う。

<課題と今後の展望>

大きな課題は、やはり運営資金である。1日1000円の利用率では当然賄えるはずもなく、寄付金や助成金に頼って来たが、今後長く活動を続けるためには、ある部分事業化を進めていかないとやっていけない状況にある。手のひらグッズや石けんの販売、手のひらカフェなどを模索中である。

運営主体である NPO 法人日本の森バイオマスネットワークの得意とする森林関係の研修、ツアーの会場としての利用や、自然体験活動の拠点としても利用していただく事で運営資金を集め、被災者支援を続けて行きたい。

放射能の影響が出てくるのは4～5年後と言われている。保養はまだまだ必要であるし、心のケアはこれからますます重要になってくるだろう。

国や福島県が、この問題と真正面から向き合い、本当に必要な支援を真剣に考えて欲しいものである。

<利用者アンケートから>

毎回思うのですが全国からの寄付や支援のおかげで安く宿泊させてもらえて、色々なイベントや体験が出来て、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。スタッフの方々にも家族のように接していただいて、楽しく過ごすことができました。ありがとうございました。

スタッフの皆様、ボランティア、地域の方々には大変感謝しています。どうぞお体を大事にして下さい。栗コーダーカルテットのコンサートはとても素敵でした！！やっぱり美しいもの、リアルなものはいいですよね！！子どもも演奏中、ずっと興味を持って聞いているのが嬉しかったです。利用者に自分も含めリピーターが多かったのですが、「抽選とか初回の人優先にしないでいいのかしら？」と思いました。どうでしょう？

福島の第一原発は未だに放射能を出し続けています。世間ではあまり騒がれなくなってきましたが、日常生活の場が汚染されている以上、私は子ども達をできるだけ長く保養に連れ出したいです。家族や親戚の様に私たちを迎えてくれる太陽の家の存在は、私たち家族の心の支えになっています。

このような支援は大変ありがたいので今後も続けて欲しいです。楽しく過ごすことができました。ありがとうございました。

スタッフの方やボランティアさんには大変お世話になり、いつも感謝しています。太陽の家がはじまって、8ヶ月がたとうとしています。日々試行錯誤の中、この施設を運営されていることと思います。利用者である私たちにしか言えないことやスタッフの方にしか言えないことなど、小さな問題も時にはあるかと思いますが、未来を担う子ども達の健康を考えるとという共通の目的を確認し合うことで、それらをクリアしていけたらいいなと思います。色々な方が利用されるので、必ず何らかの問題は起こると思いますが、その都度キチンと話し合い、何が問題だったのかを認識することができれば利用する私たちにとっても、ボランティアさんにとっても、より充実したものになるのではないかと思います。

現在暮らしている所より低い線量なので、外で子どもを遊ばせていても安心して見ていられました。また、他の利用者さんとお話することで、普段気になっ
ていてもなかなか話せずにいることを吐き出せてよかったです。

子どもの本当の笑顔が見られてうれしかったです。居心地がよく帰りたくない
のは子どもも一緒のようです。帰ったらまた、手のひらに行きたいコールが始
まりそうです。私も嫌な事や不安な事を忘れて、たくさんしゃべり、おもいつ
きり笑ったり100%リフレッシュできました。

家の中では、私と主人が放射能のことで話が始めると、空気が重くけんかにな
り、子どもも感じて親に気を使ったり、空気を読んで生活させてしまっていま
す。手のひらに滞在中はスタッフの方々やボランティアの方々がとても良くし
てくださり、自由に遠慮なく、子どもらしく心の底から笑っている姿が見られ
ました。

手のひらに太陽の家があることで、気持ちが強く前向きになれます。

スタッフのみなさんには、いつも私たちの事を考えて想ってくれて、ついつい
甘えてしまいます。温かい気持ちになります。

ボランティアのお兄さんお姉さんにも全力で遊んでいただき、子どもも私も良
い経験をさせてもらいました。感謝でいっぱいです。子どもがこの経験を心で
感じ、成長して将来ひとのためにできる事をしていってほしいと願います。

今回はビオトープ作りに参加した事がとても楽しかった。福島から来ている母
子に必要だとおもう庭について、おもいのたけを言う事ができたし、そのワー
クショップがとても充実しておもしろかった。

放射能の影響が、低線量の場合の実例がない現在、子ども達の安全を確保する
ためには、一定期間の保養が有効であり、かつ必要だと思う。

福島にいる時には「ダメー」「コラー」が多いですが、太陽の家では子ども達のがびのびと生活させていただいたため、家にいるときより素直でおりこうさんで、振り返るとほとんど怒っていないなーと感じました。子どもも私も放射能から解放されて、毎日のびのび気分晴れやかに過ごせました。

規則正しい生活をして、毎日思いっきり遊べてぐっすり寝て、ごはんもモリモリ食べていました。朝からしっかり食べる子ども達を見たのは久々でした。

期間が決められていなくて、年齢制限もなく、普段とそんなに変わりなく生活出来る太陽の家は最高です。他の保養は、普段とあまりにも違うので、外で遊べてもすごく疲れる事があります。保養がどんどん減っていくたびに、福島で心が沈みます。「太陽の家があるから大丈夫!」とずっと心の支えになってください。

これからますますこのような場が必要だと感じました。週末ごと遠方に行くのは計画するのも大変な労力が必要だし、経済的にも無理があります。それが半永久的に続くのです。ここに来て子どもは自然にふれて走って遊び、親はいろいろ語り合う・・・ずっと必要です。

補助金等の関係で、運営面で厳しいとは思いますが、利用させてもらっている福島の方達は、ここで「元気」をもらっていることをずっと忘れないでほしいです。ここで親も子どもも笑顔になって帰っている事を。本当に「ホッ」とします。

とても心地よい雰囲気を出しているこの「手のひらに太陽の家」が大好きです。ぜひ、地域からも愛される施設としてこれからもがんばって下さい。

福島に住む家族の心のよりどころとして、長く続けてほしい。登米市は自然もあり、生活するにも便利で保養にも向いている場所だと思います。

放射能に関する価値観は、福島では話せないギャップがあるので、同じ気持ちでいるお母さんとお話し出来るのは、何よりリフレッシュできます。

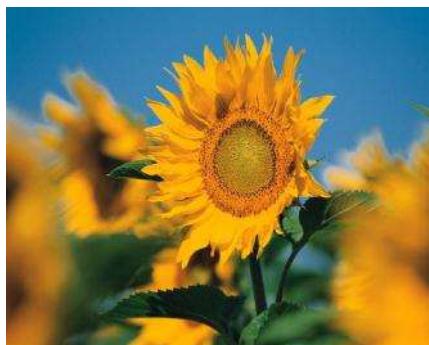
数年後に健康被害が増える事が予想されます。次男も嚢胞が発見され、私自身も昨年首が腫れて橋本病などと言われました。今後の子ども達のためにもここは続けてほしいです。(保養によって嚢胞の大きさが減るというデータがあるそうです)

福島では本音を言えないでストレスをためている方々がたくさんいると思います。本音を言える場所があるだけでもストレス発散になると思います。こういう場を作っていただき、ありがとうございます。

手のひらに太陽の家に入った瞬間、体中のストレスが消えたように思いました。自然素材のものは人間へのダメージが少なく、本当に素晴らしいと、手のひらに滞在して実感しました。

施設はもちろんですが、スタッフの温かいお人柄にも癒されました。感謝の気持ちでいっぱいです。たくさんのパワーをいただいたので、また郡山での生活がんばりまーす！

以上、最近3ヶ月のアンケートからの抜粋です。



<まとめ>

昨年、開所にむけて具体的な準備が始まったのは3月。まだ建物の基礎もできていなかった。事前に2回のキャンプ「手のひらにタッチ！」を開催し、福島の需要を確認するとともに、登米市にできる「手のひらに太陽の家」を紹介した。この頃から募集を開始したが、あっという間に予約が埋まり、開所の時にはキャンセル待ちが出る程であった。福島の親子が夏休みを過ごす場所を必死で探しており、助成金が出るような企画はあっという間に埋まってしまうこと、条件のいい保養は抽選になり、なかなか思うように保養ができないことなどの現実が浮かび上がって来た。

手のひらに太陽の家は個室もあり、プライバシーがある程度守られながらも孤立する事なく過ごせるところが特徴で、期間も限定していないので、使いたい時に利用できる。利用料も1日1000円（未就学児無料）と格安であり、その点をアピールしてきたが、小学生以上の子どもがいる場合は学校の事があるので、やはり気軽には使えないのが現実のようであった。

手のひらに太陽の家が必要である事は、利用者のアンケートや直接いただく言葉からも明らかで、本当に必要になるのはこれからといっても過言ではない。今後、移動教室や長期利用も視野に入れた需要に適切に対応できるような体制作りや、広報が必要になってくるだろう。

震災から2年が過ぎ、除染もかなり進んではいるはずであるが、保育園でお散歩ができない、園庭で遊ぶ時間も限られているなど、子どもを取り巻く環境は未だに厳しいままである。立派な室内遊技場ができたところで解決出来る問題ではないはずで、その事は子育て中のお母さん達が一番敏感に察している。子ども達も、今自分たちのまわりに起きている事の意味は薄々わかっているはずで、成長の段階でそれぞれに感じたり考えたりしていくことになるだろうが、「あのとき、自分たちのことを考えて動いていた大人達がいた」という事実が、その子が生きていくうえで力になっていくものと信じたい。未来を担う子ども達の健やかな成長のために、今できる事をやり続けなければ、と思う。

